

[5]

氏名	林 篤宏 ^{はやし あつひろ}
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	文博第 295 号
学位授与の日付	2024 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	T. S. エリオットの批評思想と実制作についての総合研究
論文審査委員	主 査 教授 若林 雅哉 副 査 教授 長谷 洋一 副 査 教授 三村 尚彦

論文内容の要旨

林篤宏氏の論文「T.S.エリオットの批評思想と実制作についての総合研究」は、T. S. エリオット（Thomas Stearns Eliot, 1888-1965）の批評思想を中心に、その変容と実制作との関係、また周辺の文芸思潮との関わりを論じたものである。批評と実制作、そして受容経験にわたる総合性は、エリオットの思想の要求するところでもあった。どういうことか。エリオットの批評思想の核心には「更新される有機的全体」という独自の発想がある。ここでの「有機的全体」とは、伝統的な詩学（制作術）や作品論にみられるような、作品内部に看取される特質（「多様の統一」）とは異なっていた。エリオットのそれは、読者などの受容、または詩人による制作、さらには批評家による批評の現場において各人がその読書経験の歴史性のうちに編成する「作品の（外的）ネットワーク」のことをいう。エリオットによれば、そのネットワークを参照しつつ各人が用意する「尺度」によってこそ、作品の受容・制作・批評が達成されるのである。また、このネットワークは、新たな読書経験と既存のネットワークとの交渉の中で新陳代謝されていくだろう。「更新される有機的全体」とは、この事情を述べるものである。エリオットは、終生、この思想を維持していた。その思想が義務付けるように、時代の推移の中でのエリオットの個々の作品や作家に対する関心と評価は変遷していったとせねばならない。しかし、むしろ興味深いのは、そのような思想が要求する柔軟な相対主義に対して、エリオット自身は頑固な伝統主義者（そういつてよければ、このアメリカ人は、伝統的ヨーロッパ文化の礼賛者）でもあった点である。エリオットの思想に従えば、ある個人の経験の歴史性は、ホメロスやダンテの価値をなおざりにしてしまう可能性がある。しかし、エリオットは、「主流」概念を持ち出して、ヨーロッパ文化の伝統を特権化したのである。本論文の特徴として、この相対主義と伝統主義のせめぎあいを考察した点を挙げる事が出来るだろう。論文は次の四部からなる。

第Ⅰ部は、エリオットの思想の根幹である「有機的全体」について明らかにしたものであり、エリオットの思想の中心とともに、林氏のエリオット理解の基盤を明確にしている。すでに記したように、「有機的全体」とは、過去の作品たち（「記念碑的作品」）のネットワークが導く、文学の制作・受容・批評における基準となる尺度であった。読者によって編成された「記念碑的作品」たちが示唆する「有機的全体」というネットワークは、まずは、新たに受容される作品に対してその価値を決定する尺度となる。このとき、それらが示すひとときの「有機的全体」もまた、新たな作品たちの参入により、編成の見直しを迫られることになるだろう。つまり、「記念碑的作品」たちは新参者によって常にその地位を脅かされているのである。しかも、人々の保持する「有機的全体」の編成は多種多様であるために、文学作品は読者各々によって多様に評価されることは言うまでもない。批評家は、この不断に移り変わる受容とその尺度に意識的でなければならないと、エリオットは主張したのである。エリオットの批評思想の中核には、この不断に更新されてゆく、しかも個人の受容の在り方により多様でなくてはならない「有機的全体」という発想があった。第Ⅰ部は、以上を原典テキストの厳密な分析から明らかにしたものである。以降の各部は、第Ⅰ部を基盤とした「各論」として本論文を支えている。

第Ⅱ部では、エリオットによる詩のアンソロジーをめぐる議論が検討される。いわば他者の「有機的全体」と、また別の読者たちの経験の関係を考察したものである。詩のアンソロジーは編者の評価を作品群によって示すものであり、後世の読者たちの前では、それは“他者による”ひとときの価値判断以上の意味をもたない。しかし、エリオットはアンソロジーの存在には肯定的であった。そのようなアンソロジーは、様々な理由により普段手にとることが少ない作品、例えば文学史上では無名な作品や、著名ではあるが現在では読まれることが少なくなった作品などを、効率よく紹介することにより、読者の「有機的全体」の更新の手助けをするだろう。つまり、エリオットがアンソロジーに見出す意義は、誰であれ他者の価値判断それ自体ではなく、各人の読書経験の効率化と、そこから自ら携わる「有機的全体」の編成の自主性にこそあった。エリオットの金看板たる「相対主義」は、ここでは額面通り機能しているようである。

第Ⅲ部では、エリオットの詩劇批評・実制作の検討を通じ、彼の思想の推移を検証するものである。ここでの関心は、いわば「内容」中心のエリオットの批評が「形式」的側面への関心を増していった状況にある。エリオットの思想が絶え間ない「尺度」の変化を要求する以上、その推移自体は必然とせねばならない。この事情について、第Ⅲ部は、時代状況と実制作の「経験」のただなかでエリオット自身の「有機的全体」が再編成されていく様相を具体的に跡付けるといった課題に取り組んでいる。詩劇制作に注力した後のエリオットは、詩の韻律形式にまでその批評的関心を拡大していった。そして、その射程は他者の詩劇作品に対する批評にとどまらず、自作の「内容」や「形式」に対する自己分析を行うに至った。この経緯の中で、自身の制作実践が、エリオットの批評へとフィードバックされているのである。ここに、エリオット自らの詩劇作品の参入によって、その尺度が、「有機的全体」が再編成された様を林氏は見て取るのである。

第Ⅳ部では、エリオット自身が評価の対象となる場合を考察している。具体的には、エリオットと同時代の周辺の文学潮流との相互の観測、あるいはレッテル貼りを検討しつつ、彼に対する絶えまない評価の更新の一端を明らかにしていくものである。エリオット

はニュー・クリティシズムの源流の一人と目されていることもあるが、彼自身そしてニュー・クリティシズム陣営の批評家たちの双方は、そのような位置づけに対し反発を示し、両者は互いに距離を保っていた。その一方で、ニュー・クリティシズムの末流と見なされる“解釈”一派は、むしろエリオットを自身たちの始祖に祭り上げ、積極的に接近を試みようとした。エリオットは彼らに対しても、その批評方針には一定の評価を示しつつも、ニュー・クリティシズムと同様に、自らを何らかの批評潮流の一翼に加えようとするそのような動向については慎重な姿勢を示した。しかしながらこのような思惑とは裏腹に、生前・死後にわたって今なおエリオットには様々なレッテルが貼られ続けることになる。そしてそれは、エリオットが終生保持した更新され続ける「有機的全体」という発想においては、避けられぬ運命にあったとせねばならない。エリオットの各種テキストもまた、読まれる対象、読書経験の中での吟味と評価の対象であった。このように本論文は、制作・受容・批評の各現場はもちろん、エリオット自身に対する後世の評価のありようにも、更新され続ける「有機的全体」という思想を見届けて結ばれる。

論文審査結果の要旨

提出論文の全体にわたり緻密な分析と丁寧な考察が繰り広げられており、これについては審査委員全員が認めるところである。但し、テキストを丁寧に扱う慎重かつ堅実な姿勢ゆえに、(本報告書、「1.論文内容の要旨」の最初に指摘した)エリオットの伝統主義者としての側面(たとえばダンテ崇拜)と、徹底した相対主義を示唆する思想(それぞれの読書経験の歴史性が開き示す、それぞれのため「だけ」の「有機的全体」)のあいだの「せめぎあい」については、著者による踏み込んだ表現や批判が見えにくいという憾みもなしとしない。これもまた審査委員全員の偽らざる感想である。もちろん、その核心となる「主流」概念や、伝統的な「感触」概念についての考察はなされており、論文としての完成度を損なうものではないが、幾ばくかの覇気が欲しかったというところであろうか。公聴会では、この問題系に即して、活発な質疑応答と議論が展開された。以下、それを整理して述べておく。

なにより、エリオットのホンネとタテマエについてである。第I部で扱われたエリオット自身の思想の核心、「更新され続ける有機的全体」についての著者の考察は分かり易い。そのうえで、そこに割ってはいるエリート主義・ヨーロッパ主義の痕跡(誰であれ、認める「べき」ホメロスやダンテなどの「主流」への瞻仰)についても目配りの行き届いた議論も十分に展開されてはいる。しかし、審査委員からは、エリオット自身の(ホンネとタテマエの)葛藤と、そこに整合性を与えようとするエリオット自身の苦心は丁寧に分析されているが、さらに踏み込んで、エリオット自身の議論が内破されるような批判的な考察がないのだろうかという感想があった。これについては、著者自身も期するところであるとの応答があり、今後の展開を待つこととしたい。公聴会では、これに関係する話題として、「感触」概念の妥当性についての議論が続いた。これについても次に報告しておく。

エリオットは、詩人の(そして、後世には決して再構成がかなわない)思惑としての「感

情」(emotion)と、詩句や言葉に伝統的・歴史的にまとわりついている「感触」(feeling)の二つを立てていた。詩人の「感情」は消えても言葉の「感触」は残る。後世は、その言葉に伝統的・文化的に与えられていた「感触」をたどり、詩人の思惑を自らのものと(捏造)する。「才能ある詩人は言葉の「感触」を操る」とはこのような事情において起こる。しかし、後世の読者の持ち込む「感触」を詩人は予測できないため、後世が言葉に対して与えられてしまう(詩人の与り知らない)「感触」は排除できないのではないだろうか。これが審査委員から著者に投げかけられた質問であった。これについての著者の立場は明確であった。現象としては、そのような予期せぬ「感触」の登場は認めざるを得ないだろう。しかし、著者としてはエリオットの議論には組み込みにくい事情が二つある。まず、エリオットの崇拜するラテン語由来の言語使用・伝統的な「感触」は、エリオットによれば既に展開を止めており、ラテン語が培った汎ヨーロッパ的な文脈について述べるエリオットの議論に、いわば現代の「頹落」を持ち込むことはアナクロニズムを犯すことになるため、今回は禁欲したとのことであった。また、そのようなアナクロニズムをあえてする議論(たとえば、言語は未来の使用予測にひらかれているとするバフチンなど)も承知しているが、そこに与することは、エリオットに別の思想をひっかけることになるだろう。もちろん、第IV部で検討したように、そのような理解や利用にエリオットの議論もまた開かれているはずだが、著者は先の解決とは別の選択に賭けるというものであった。

最後に記しておくのは、有機的全体というネットワークを構成する「個」の問題の議論である。また、これは上の「感触」とも関係する問題でもあるだろう。つまり、有機的全体というネットワークは各人の「記念碑的作品」により編成されるとしても、そこには作者のイメージや思潮などが(「感触」同様に)まとわりついてはいないかという問題であった。これについては、人間の体験の記述や「了解」についてのアプローチとして可能ではないだろうかとして、参加者の意見が大いに交わされた。今後の研究において著者も意欲を示すところであったが、本論文に関わる審査報告としては割愛することとする。

以上の公聴会を経て審査委員全員で確認したところ、論文全体として、テキストに対しては誠実に、また議論としては緻密に、そして記述として説得的に展開された意欲作であると認めることで一致した。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。